

A子とゆい

A・Y

A子、三歳。ちょっと気になる子でした。

ある日のこと、

「先生、お弁当作って持って行くから赤いおうちで待ってね。」

と、声をかけてきました。これは是非とも応えましょうと、いそいそと赤いおうちに行って待っていました。この「赤いおうち」は、園庭の奥の方にある小さな家で、保育室からはかなり離れています。A子がバッグにお弁当箱を入れてやってきました。「A子ちゃん、待ってたわよ」という気持ちで迎えると、

「ジャンケンして」

と言うのです。「あれ、私にくれるんじゃないのかしら……」と思いつつ、近

くにウロウロしていた二人とジャンケンをすると、運よく（と私は思いました）私が勝ったので、

「勝ったわ」

と、嬉しそうに言うと、今度は

「負けた人にお弁当あげる」

と言うではありませんか。きよんとする私。

「残念、食べたかった」

と言いつつも、“えーっ、それはないでしょう”と思いつつ、私のA子への思いの空振りにカチカチ山のたぬきを連想して、“たぬきの気持ちかわかる”なんて考えていました。一生懸命にうさぎに誠意を尽くしているのにピシャッとやられるたぬき、あの心境でした。そして、年頃の乙女とそれに振り回される男性ってこんな感じかしら、つらいでしょうね、太宰治もカチカチ山でそう言ってたっけ。などと、少々飛躍しながら思っていました。

A子は、まだ私に対してのガードがかたく、この人はどういう反応をする人なのか、どこまで応えてくれるのだろうか、信頼するに足る人なのかなど試していたのでしょうか。私への関心はあるのですが、なかなか心を開いてくれません。このような出来事を繰り返しながらの日々が続きました。

A子は人一倍相手の反応や周囲の状況に敏感なようです。遊んでいても人が近

づくと、相手の反応を確かめたり、瞬時に予測して対応したりしていました。ある日、箱積木を山のような家のような形に重ねて小さなぬいぐるみの動物を乗せて遊んでいました。そこへ同じ様なぬいぐるみを持ったB子が近づくと、B子はまだ何も言わず、何もしていないのに、

「もうはいれません」と一言。

B子はポカンと立っていました。また、A子がお店屋をはじめていすにすわり、「いらっしゃい、いらっしゃいお店屋です。」と声を出しました。近くにいた何人かがそれを聞いて、「ください」と行くと、

「もうやってません」

とことわるのです。

日頃の姿からは、人への関心はあるように思えます。自分の方からの働きかけに相手が応えてくれるかどうか、またどう応えてくれるかとても気になるようです。でも、まだ反応を受け止める態勢になっていないのでしょうか、自分の世界を守りたいのでしょうか、壁を作ってしまうのです。

友だちに話しかけられたりさそわれたりした時のA子は、少しぎくしゃくした様子で、「いやだ」「いらぬ」「だめ」など拒否的になりがちで、「そんなふうには言わなければいいのに」と思うことがよくあります。でも、だんだん表情に言葉とは反対の気持ちが表れるようになりました。

A子を見ていて、素直にすんなりと自分の気持ちや要求を「うれしい」「いやだ」「ほしい」「やって」「やりたい」などと表すことはとても大変なことなんだと感じさせられました。

数か月たってA子の私へのガードは低くゆるやかになりました。年長組のお店に買い物に行き、嬉しそうに帰ってきて

「先生、肉まんあげる！」

と、買ってきた肉まんを私の口元に出してくれる様子は、ごくごく自然でした。

